

# プレ FD の取り組みの現状と課題

## —京都大学プレ FD プロジェクトを視察して—

中居 舞子（広島大学）  
山田 直之（広島大学大学院・D1）  
都田 修兵（広島大学大学院・D1）  
松田 充（広島大学大学院・D1）

### 1. はじめに

教職課程担当教員養成プログラム（以下、教職 P と略す）では、例年、当プログラムと類似した取り組みや国内外の先進事例を視察し、互いのプログラムの質向上のために意見交換等を行っている。本年度も、教職 P の取り組みを省察する視点を得ることを目的として、類似した取り組みを進める京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトの授業を参観し、授業前後に意見交換を行った。これにより、京都大学が主宰するプレ FD プロジェクトの現状を把握し、実際に行われている授業と授業検討会の様子を知ることができた。本書では、その具体的な内容について記述し、成果報告とさせていただきたい。

なお、今回の視察への参加者は、山田直之（広島大学大学院教育学研究科 D1）、都田修兵（同）、松田充（同）の 3 名である。これに加え、教職 P 運営者の中居も同行した。視察の日程と授業概要については、以下の通りである。

#### ◆日程：2015 年 12 月 17 日（木）日帰り

11:00 JR 東広島駅 集合（新幹線にて京都へ移動）

14:20 京大正門前到着

15:00-16:00 京都大学高等教育開発推進センター准教授 田口 真奈氏との意見交換

16:00- プレ FD 授業準備

16:30-18:00 プレ FD 授業参観

18:10-19:10 プレ FD 授業後検討会

19:20 京大正門前出発（新幹線にて東広島へ移動）

22:30 JR 東広島駅 解散

#### ◆授業概要

授業者：植田 尚樹氏（京都大学大学院文学研究科 OD、非常勤講師）

授業科目：基礎現代文化学系ゼミナールⅡ 木曜 5 限（16:30-18:00）

授業テーマ：音韻論研究とモンゴル語

このたびの視察は、教職 P 運営者（中居）の一方的な想いと、この企画に賛同し（タイトなスケジュールであるにもかかわらず）参加を表明してくれた心意気のある院生 3 名の協力によって成り立ったものである。そして、私たちを快く迎え入れてくださった田口真奈氏（京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授）をはじめ、京都大学の皆さまの

ご協力に対する感謝は言うまでもない。田口先生には、2013 年 3 月に京都大学にて開催された第 19 回大学教育研究フォーラム（参加者企画セッション「博士課程学生がすすめる〈FD〉」）において、指定討論者として教職 P の意義や課題等のご意見をいただいていた以来、たいへんお世話になっている。今回の視察も、田口先生のご協力により実現することができた。

さらに今回、プレ FD 授業の視察前に、田口先生の研究室を訪問し、意見交換をさせていただく機会を得た。まずは、その内容に関する報告（山田）から始め、視察をした授業に関する報告（都田）、授業後の検討会に関する報告（松田）、と続けて報告をしたい。

（中居舞子）

## 2. 研究室訪問について

授業視察の前に、田口真奈准教授の研究室を訪問した。本報告書では、その時の談話の様子を述懐する。談話時間は 15：00～16：00 の約 1 時間であり、談話の内容は大きく分けて、(1.) 広島大学・京都大学のプレ FD プログラムについて、(2.) 他大学の取組みなど院生の学び一般（特に TA）について、であった。

### （1）プレ FD プログラムについて

田口先生の研究室に到着して、簡単な自己紹介を済ませた後、今回の訪問の意図と広島大学の取組みについてお話をさせていただいた。いくつかのやり取りの後、田口先生に広島大学の取組みの特異性を指摘していただいた。それは次の点に収斂されたように思う。つまり、広島大学のプレ FD は、大学院生が「プログラムを運営・改善する視点と、プログラムに参加する視点」の両方に力を注いでいる点である。特に、プレ FD を専門の研究対象としていない院生たちが、「自主サークルのような形」で研究を行っている点が興味深いとのコメントをいただいたことが印象的であった。京都大学のプレ FD では、運営側とプログラムを受講する側は完全に分離している。つまり、大学院生は「ある種サービスを受けるように」プレ FD を行っているという。学生が主体となり、運営についての検討を行う視点は、主体的という点で歓迎すべきであるが、「限界もあるだろう」とのご指摘もいただいた。また、京都大学では、授業デザインだけでなくコースデザインを学生が考えるという取組みもしているとおっしゃられた。コースデザインであっても、「逆向き設計」を用いるという点は興味深かった。しかし、受講生が多様なバックグラウンドをもっている場合、「誰にでも必要な一般的なスキル」が到達目標になりやすいと言う。

### （2）TA について

話題はプレ FD にとどまらず、TA の授業での役割といった話にも及んだ。広島大学は 2016 年度から TA の階層制度を導入するが、このような取組みは筑波大学も行っているそうである。京都大学での TA の役割をお尋ねしたところ、「コンソでは TA は使っていない」とのご回答をいただいた。関西大学の SA 制度などは上手く機能しているとのことであった。TA の確保に重要なのは「居場所」であるとおっしゃられたことが印象的であった。

（山田直之）

### 3. 授業について

#### (1) 授業全体について

今回、京都大学のプレ FD プロジェクトの一つを見学させていただいた。講義は、植田尚樹氏（非常勤講師）による「音韻論研究とモンゴル語」の第2回目（「モンゴル語」はどのような言語か）であった。

この講義の特徴は何人かの教員によっていくつかの講義がなされるところにある。また、講義のコンセプトが「自身の研究（領域）を初めてその講義を聴く学生にわかりやすく行う」ことにあるのは興味深い。以下、講義の内容に沿って報告していくことにしたい。

まず、前回の復習を行いながら、学生の側からの質問をいくつかとりあげ回答していた。その質問のなかには今回の講義の関係のある「子音と母音」に関するものがあった。それを一つの契機として講義の内容に進んでいった。

講義は「1. モンゴル語の位置づけ」へと進んでいく。ここでは、モンゴル語の系統（アルタイ語、モンゴル諸語、モンゴル語…）、地域、方言差（ここではハルハ方言、内蒙古方言の2つに着目）について、説明がなされ、モンゴルとモンゴル語の全体像を描写する講義場面であった。

次に「2. モンゴル語（ハルハ方言）の類似的特徴」へと講義は進む。ここでは、視聴覚教材が頻繁に使われていた。たとえば、横綱朝青龍と白鵬がインタビューにモンゴル語で答えている場面、テレビ CM でモンゴル語が話されている場面を取り上げるものであった。自然とモンゴル語へ自身の興味が惹きつけられる場面であった。そのうえで、いくつかの例文を用いながら、モンゴル語を類型論 (typology) によって見ていった。すなわち、基本語順、文法的特徴などといった分類によってモンゴル語を見ていった。

講義はさらに「3. 音韻的特徴」という植田氏の専門分野に展開される。まずは、「(a) 母音的特徴」を取り扱っていた。モンゴル語は7母音体系であり、母音の長短の対立が弁別的（意味の区別を有する）であることを説明し、そのうえで課題を行わせていた。以下、課題の内容である。

課題：モンゴル語では、多くの接尾辞が2つ以上の形式を持ちます。以下のデータを見て、「～して」、「～させる」を表す接尾辞では、どのような条件でどの形式が用いられるか指摘しなさい。また、なぜそのようなことが起こるのか、その理由を考えなさい。

\*講義で配布されたレジュメより。ただし、データについては割愛している。

この課題に基づいて、学生たちはまず個人で考え、その後ペア（グループ）でのディスカッションをするように指示されていた。一通り課題作業が終わると、いくつかのペアにディスカッションの内容を発表させていた。課題は難しいという印象を受けたが、学生たちの発表を上手くまとめていたように思う。課題後、アクセントは弁別的でないこと、決まった位置にアクセントをもつことも説明していた。

次に「(b) 子音体系」を取り扱った。ここでは、子音について概説的な説明がされたように思う。ここでも、例文を用いながら、丁寧な説明が加えられていた。

さらに、講義は「(c) 音節構造」に進み、母音を中心としたかたまりによってモンゴル語

を見ていった。

「3.」では、母音と子音体系に重点がおかれていたように感じた。  
最後に、「4. まとめ」として、①言語を「通言語的に」捉える視点の必要性、②言語を「体系的に」捉える大切さについて説明し、講義を終えた。

## （2）授業を受けての印象

全体を通して講義は非常に綿密につくられていた。詳細は割愛するが、分刻みで講義をどう進めていくかの「授業デザイン用ワークシート」がつくられており、講義全体の流れ、および教授機能などについて丁寧に構成されていた。

なにより、講義を綿密につくり過ぎれば、時間配分などに気を取られて講義自体が窮屈なものとなりかねないが、植田氏の授業においては、その窮屈さを感じることはなかった。むしろ、授業全体の流れはスムーズであったし、授業に慣れている感があった。もちろん、その人の才能も関係しているだろうが、プレ FD という機会のなかで授業に関する多くの知識や技術などが培われたと考えることもできよう。

はじめてモンゴル語の授業を受けたが、モンゴル語に興味を抱くことができるような、わかりやすい授業であったと個人的には思う。

(都田修兵)

## 4. 授業検討会について

授業終了後に、文学部のプレ FD のコーディネータを担当している長井先生の研究室にて、授業者と授業観察者で授業検討会を行った。検討会の参加者は長井先生、田口先生、教務補佐の安田さん、授業者の植田さん、前々回まで当該の科目を担当されていた菅原さん、加えて、広島大学の四名であった。検討会の進行は、参観者が自身の記入したリフレクションシートに基づいて授業者に質問し、全員が話し終わった後に、授業者が一人ひとりの質問に回答していく、というものであった。そして、授業者からの応答の後に、学生からのコメントシートを参照しながら、自由な議論が行われた。なお、授業検討会は、我々の参加に関係なく、プレ FD の授業後には必ず行っている、ということであった。

議論となったことは、主に次の三点であった。一つ目は、授業で設定された二つの課題の難易度は適切であったのか、二つ目は、授業者はマイクを使用すべきだったか、三つ目は、学生への授業への動機づけをどのように行おうとしていたのか、であった。以下では、検討会で議論となったことに合わせて、感想を述べていく

一つ目の課題の難易度について、授業中に学生から「何を考えてよいかわからない」という発言があったように、学生にとって初めて触れるモンゴル語に関わる課題は、相当に困難であったようである。検討会でも、「課題の難易度が高かったのではないか」という質問がなされた。このことについての授業者のリフレクションは、「音韻論は規則性を発見し、それを説明する理論を考えることが重要であるために設定した課題であった」というものであった。つまり、課題設定の意図は、音韻論という学問の思考形式に触れる機会を提供することであった。これは、「自分の研究を 3 回の授業で分かりやすく伝えてほしいと思っている」という長井先生の授業に対する趣旨に重なるものである。確かに、学生が授業を通じて何を学ぶかということも重要であるが、若い研究者が学問の魅力を学生に伝

えるということに、この授業の意義の一つがあると感じた。

二つ目のマイクの使用の是非については、前回の授業後の学生からのコメントシートで、「マイクを使った方がよい」と「使わない方がよい」という両方の意見があったため、使うかどうかを考えたうえで、マイクを使用したということであった。検討会では、マイクを使うことによるメリットとデメリットが議論された。しかし、学生からのコメントで、「マイクを使った方が聞きやすい」と、逆に「使わない方が聞きやすい」という両方のコメントがあったように、学生にとってどちらがよいかということを考えるのは難しい。そこで、マイクを使うことを聞きやすさの問題だけで捉えるのではなく、例えば、授業の中の大切な話をする場面ではマイクのスイッチを切って話す、といったように、学生の意見から、どのような教授行為を省察するべきなのかを議論する必要があると感じた。

三点目は、植田さんが所属する「系」と講義が開講されている「系」が異なっているために、学生としては植田さんの講義を受講することそれ自体に動機付けられていない。そこで、この授業への別の動機づけが必要ではないか、という議論であった。授業者としても、そこに授業をするうえで悩ましい部分として考えているということであったが、学問の魅力を伝えていくことによって授業への動機づけを行いたい、という旨の応答がなされた。長井先生がおっしゃられた授業の設定上、授業者は授業に対して学問の魅力を伝えようと真摯に取り組まれていると感じた。しかし、一人の授業者が担当する授業が三回という設定上困難であるかもしれないが、動機づけをする上では、リフレクションシートなどを用いて、学生に評価やフィードバックを行い、授業そのものに取り入れながら授業を構想していく必要があると感じた。

(松田充)

## 5. おわりに

最後に、今回の視察を振り返り、教職 P を省察する視点として見えてきたものを整理する。「4. 授業検討会について」において報告されたように、「学問の魅力を伝えようと真摯に取り組まれている」というのが、今回授業を参観させていただいた印象であった。大学での授業を構想するにあたって、この点は非常に重要であろう。しかしそれと同時に、専門職養成課程の科目担当者としての責任も浮上する。教職 P では、ティーチングの技能を習得することよりも、むしろ教員養成に関する知識を身につけながら、自身の授業哲学を練り上げることに主眼が置かれている。そのため、授業検討会においては、ティーチングの技能に関する議論よりも、実習生の授業内容に踏み込んだ議論をすることが重要視される。だからこそ、授業検討会には、教壇実習をさせていただく科目の担当教員だけでなく、他の教職科目担当者が TA 指導教員として加わり、議論をすることが求められるのである。ともに教育学研究を生業とする教職科目の担当者間でも、専門分野による微妙な見解の違いが浮き彫りとなり、それが授業や研究の改善に繋がることも、面白さの一つといえよう。

また、「2. に研究室訪問について」において報告されたように、広島大学の教職 P は、大学院生が「プログラムを運営・改善する視点と、プログラムに参加する視点」の両方に力を注いでいる点に特色がある。運営に関しては、各年度の担当者の願いや思いで動いているところもあるが、基本的には履修生の主体性によって活動が継続されている。履修生

それぞれが教職に関する知識を身につけたり、授業の質を向上させたりするだけでなく、プログラム自体を改善する取り組みも並行して行ってきた。それが、毎年継続して行ってきた共同研究の成果なのである。これまで、教職 P の取り組みの独自性と課題、そして今後目指す方向性を見極めるために、教職 P 修了生へインタビュー調査を行ったり、「育みたい教師像」という視点から教壇実習における PDCA サイクルを見直したり、教壇実習における授業検討会のあり方を省察する研究を行ったりと、多様な方面から研究を行ってきた（より具体的には過去の報告書を参照のこと）。それらを外部へ発信する取り組みも少しずつ始め、それに伴って研究内容も深化してきたように感じる。今後もこのような取り組み内容、というよりも姿勢を大切にし、継承していくことが肝要であると考えられる。そのために、今後も個々の履修生が主体性を発揮できる仕組みづくりを進めなければならないが、それぞれの研究が個業化してしまうことを防がなければならない。教職 P という組織的な養成プログラムとして、より魅力的なものとなるよう、現状のプログラム内容や運営方法にこだわらずに、常に改善の視点を持って活動を進めていくべきなのである。

（中居舞子）